日本医学教育学会第11期の活動（1994～1996）*1

鈴　木　淳　一*2

私が会長をつとめさせていただいた第11期任期を振り返り，重要な出来事について報告申上げる．

学会創立25周年目のことであった．牛場会長の会長交代のご挨拶，新役員一覧を『医学教育』25巻2号（1994年）より引用したい．

私の在任3か月の間に，3つの大会が開かれた．

第26回日本医学教育学会大会（1994年）
大　会　長：石田　正統（埼玉医科大学・学長）
実行委員長：濱口　勝彦（同・副学長）

第27回日本医学教育学会大会（1995年）
大　会　長：望月　義夫（川崎医科大学・学長）
副大会長：勝村　達喜（同・附属病院長）
実行委員長：山下　貢司（同・副学長）

第28回日本医学教育学会大会（1996年）
大　会　長：吉岡　守正（東京女子医科大学・学長）
実行委員長：細田　瑳一（同・付属病院長）
同副委員長：橋本　葉子（同・副学長）

いずれも各大学関係者からの報告があるので，本稿でのご報告は省略させていただく．しかし，私は大会の責任の一端を担わさせていただいたことに鑑みて，各大学関係者の方々に，それぞれの絶大なご努力に感謝し，大きな成功・成果を獲ち得られたことに賛辞を呈したい．

私は，学会創設以来25年勤めた編集委員長を尾島昭次氏に交代した．『医学教育』の編集は，尾島委員長の下に，行き届いた編集，新しい方針もいくつか打ち出されて，学会誌としての活力を新たにした3年間であった．篠原出版の真弓有功社長，担当の山田　耕，藤本亨子両氏のご努力・協力にたいしても，厚く感謝申し上げる．学会誌の表紙とイラスト・コラムは引き続いてナギカツオ氏が担当された．変わらぬ品位と発想で皆を啓発していただいており，まことに有難い．

日本医学教育学会の伝統は，常置委員会，ワーキンググループ，担当の活発な活動にある．

業務担当は，別掲のように，機関会員連絡，医学教育ワークショップ，白書を含めて6つ，常置委員会（3年間継続）は，編集から国際関係まで7つでスタートした．会則検対委が担当から移って，3年目には8つになった．

ワーキンググループ（1年で更新）は5つ，特別委員会（adhoc）は4つでスタートした．ワーキンググループは大学院関係が1年で終了，ワークショップが担当から入り，基本的臨床技能教育，医学史カリキュラムが新設されて，3年目には7つになった．

これら委員会，ワーキンググループ，担当の活動は，本学会の原動力であると述べた．第11期には，卒後臨床研修の必修化の問題に関連して，卒後教育委員会（畑尾正彦委員長，戸倉康之副委員

---

*1 Report of Events and Activities of Japan Society for Medical Education during the 11th Term 1994—1996

キーワーズ：学会第11期，運営委員会，卒後臨床研修必修化，韓国医学教育学会，ブエノスアイレスの医学教育ワールドサミット

*2 Jun-Ichi SUZUKI　前会長，帝京大学医学部耳鼻咽喉科

会長交代のご挨拶

牛　場　大　蔵

日本医学教育学会は創立25周年を迎えましたが，この時を一つの区切りとして，わたくしこと会長を辞退することにいたしました．

憶えば会員とくに各委員諸氏をはじめ，機関会員，賛助会員その他関係諸団体の方々の絶大なご支援により，学会も堅実な歩みを続けることができました．ここにあらためて厚くお礼申し上げます．

わたくしも今後は心身の許す限り，会員としての尽力を続ける覚悟でありますが，この際学会のさらなる発展を目指した新しい出発を祈念して，役員からの辞退を決意したしだいであります．

幸い本年第11期の新役員会において，鈴木淳一教授が新会長に選出せられました．学会運営に経験ふかい鈴木会長の下で，新しい運営委員の方々の抱負も聞き及び，今後の学会が真に日本の医学教育の向上にむけて進まれることを確信いたします．

ここに日本医学教育学会に対する一層のご支援ご協力をお願いして，辞任のご挨拶といたします．

第11期　日本医学教育学会　役員一覧（1994～1996）

会　　長	鈴木　淳一（帝京大・耳鼻科）
副 会 長	田中　　勧（防衛医大・第二外科）
	橋本　信也（慈恵医大・第三内科）
監　　事	尾島　昭次（順天堂大・医学教育，岐医短大・病理）
	堀　　原一（筑　波　大）
運営委員	福井　次矢（佐賀医大・総合診療）
（ABC順）	原田　研介（日大・小児科）
	支倉　逸人（東医歯大・法医）
	畑尾　正彦（武蔵野赤十字病院・外科）
	日野原重明（聖路加看護大）
	細田　瑳一（東京女子医大・心研）
	今中　孝信（天理よろづ相談所病院・総合診療）
	石田　　清（埼玉医大・第二外科）
	岩﨑　　榮（日医大・医療管理）
	角家　　暁（金沢医大・脳外科）
	紀伊國献三（東京女子医大）
	菊地　　博（菊地内科クリニック）
	西園　昌久（福岡大・精神医学）
	斎藤　宣彦（聖マリアンナ医大・第三内科）
	桜井　　勇（日大・第二病理）
	高久　史麿（国立国際医療センター）
	徳永　力雄（関西医大・衛生）
	津田　　司（川崎医大・総合臨床）
	植村　研一（浜松医大・脳外科）
	吉岡　守正（東京女子医大）
（幹 事）	小寺　一興（帝京大・耳鼻科）

卒後臨床研修必修化に向けての提言*1

1995年6月

日本医学教育学会*2

日本医学教育学会は，卒後臨床教育が医師育成上極めて重要であるとの認識から，卒後教育委員会を中心に卒後臨床研修に関して種々検討を加えてきた．全国大学病院および臨床研修指定病院に対して実施したアンケート調査では「条件が整えば卒後臨床研修の義務化に賛成」という意見が多数であった[1]．次いで，卒後教育委員会によるワークショップにおいて，その実施のための諸条件を検討した[2]．

本学会はこれらの意見に基づき，討議の結果，卒後臨床研修の必修化について提言する．

1．研修医の身分・待遇・立場・生活が保証されること

1）施設長に属し，常勤医師に準じて待遇される．　2）研修者としての立場が尊重される．　3）研修にふさわしい生活環境が配慮される．

2．研修施設は適正に指定され，研修体制が整備されること

制定された基準に則り，施設・施設群ならびに設備・備品が整備され，研修に必要な診療内容および要員が確保される．

3．指導医が確保され，継続的に養成されること

研修責任者および指導体制が確立されるとともに，指導医の養成が継続的に行われる．

4．研修医の募集と採用が適切に行われること

研修施設ごとにカリキュラムが示され，公募により妥当な定員が採用され，その結果が公表される．

5．研修カリキュラムは幅広い基本的臨床能力の修得を可能にすること

1）カリキュラムは基本的な総合臨床能力の修得を目標として，各研修施設において独自に設定される．研修は総合診療方式あるいはそれに準じた方法による．研修医の目標達成度はカリキュラムとともに適正に評価され，公表される．　2）研修医各自が志望する診療科への所属は研修修了の時点において決定される．

6．研修開始時期は卒業直後に限定しないこと

臨床医学については，大学院進学者を含めて，卒業直後の研修を原則とするが，基礎医学，社会医学あるいは国外での活動などでは例外が認められる．

7．研修修了の認定はその後の臨床医としての活動につながること

研修の修了は研修施設長により認められ，その後は独立して診療することができる．この認定は学会の認定医，専門医などの資格要件の一つとされることが望まれる．

8．卒後臨床研修と卒前教育との有機的な連携が保たれること

卒後臨床研修の卒前教育からの連続性が保たれるよう，卒前教育および医師国家試験の見直しが必要である．

9．卒後臨床研修の適正な運営のために，全国的規模の第三者機構が設置されること

この機構は卒後臨床研修の計画・調整および各施設の機能評価を行う．

なお，卒後臨床研修の必修化の実施にあたっては，関係各方面の理解と支持を得るためにも，十分な準備期間が必要である．

*1 Views on the Requirements for Postgraduate Clinical Training

*2 Japan Society for Medical Education

1）医学教育 26(1)：19～25，1995

2）医学教育 26(4)：233～237，1995

長）の多大な努力の下に，また，田中　勧，橋本信也両副会長，堀　原一，尾島昭次両監事の各氏をわずらわして起草，学会誌などに学会の立場を公表した．26巻4号より引用する．

本期の3年目には本学会にとって悲しい出来事が相次いだ．懸田克躬氏，吉岡守正氏，いずれも学会にとってたいへん重要な方々である．

懸田さんとは長年，とくに親しくしていただいた．1か月の海外の医学教育視察旅行にお供したこともある．吉岡守正さんは第28回大会長の直前に亡くなられた．弟昭正さんは私が会長をつとめた第10回大会直後に亡くなられた．私は，昭正さんととくに親しくしていただいていたこともあり，感慨，悲嘆にたえないことであった．恐縮であるが，お二人に捧げた思い出の短文を引用させていただくことにする．

懸田克躬先生を思う

鈴木淳一（帝京大学，日本医学教育学会会長）

懸田さんの思い出は，数多くある．

その1つ．私が帝京大学に移った昭和46年の夏，文部省の企画で，1カ月間アメリカ・ヨーロッパの医科大学を視察して回ったことがある．

このときの思い出すべてを申し上げられないのは残念であるが，まことに忘れがたいものがある．

落合京一郎先生と懸田さん，文部省の五十嵐耕一氏と私の4人連れであった．当時医学部長であったお2人は，あらゆる点で異なる方々であった．お1人は，何でも「うまい，うまい」と召し上がるし，よく飲まれた．もうお1人は，少ししか召し上がらず，アルコールもあまり上がらなかった．文部省の五十嵐君と私はちょうどその中間で，毎日の食事のことは，落合さんだけに伺えば懸田さんは何でもOKだったので楽であった．

アメリカの2週間は，主として私が案内役を引き受けた．各大学で，医学部長はじめ大学のおえら方達を前に面談している最中，落合さんはしばしば，激しく“貧乏ゆすり”をされながら聞いておられた．

懸田さんは，そのようなとき，座ったままでよく居眠りをされた．上半分が濃い色眼鏡をかけ姿勢も変わらないので，幸い，相手に気づかれることはなかったと思う．

ヨーロッパも2週間，主にイギリスとドイツをまわった．懸田さんは，アメリカの場合とは違って，大へん活発になられ，先生の方が案内役になられた．小生はヨーロッパについてはよく知らなかったので，大へん勉強になった．また，医学部長お2人をつぶさに観察申し上げ，お話しを伺い，優れた先達から学びとる絶好の機会であった．

この1カ月の視察旅行は，お2人の医学部長のために計画されたと思われる．旅行の途中，医学教育の改革についていろいろお話がでた．

その後，落合さんは新設埼玉医大の医学部長になられ，懸田さんは，医学教育振興財団を組織し理事長になられた．旅行の途次，懸田さんから，そのような組織が必要だね，というお話がよくでた．1カ月の旅行の間にいろいろと構想を練られたのであろう．

帰国してから，何度か先生にご馳走になった．ふぐを食べに行った小さな店と大きな店，その時のことはいずれもよく覚えている．「ふぐは，きれいな店でないこういう店がうまいのだ」と聞かされた．小さい方の店はふぐがいない半年間店をしめていると聞いた．忘れがたい美味であったが，残念なことに店の名を失念してしまった．

医学教育振興財団は，文部省に協力して各大学を組織し，日本医学教育学会とは医学教育者のためのワークショップの後援その他，人の交流を含めて大へん密接な関係にある．

懸田さんはわが国の医学教育改革に尽くされ，十数年が経った．昨年九月，ちょうど一年前，医学教育振興財団の年中行事の1つ医科大学訪問で，高知医大に私もお供をした．先生は，高知ではかなり長くお話しをされたり質問にもよく答えておられた．

東京に帰られるなり入院されたと伺い驚いたことであった．ご病状は承っていたがお目にかかることはできなかった．医学教育に殉じられた先生のご冥福を心から祈って止まない．

吉岡守正先生を思う

鈴木淳一（帝京大学，日本医学教育学会会長）

吉岡守正先生は，2期にわたって日本医学教育学会の運営委員をつとめられた．運営委員会には東京女子医科大学の方がほかにおられるし，ご多忙な先生はご欠席で結構とみなが思っていた．私もしたがってこの間，十分に先生の声咳に接することは少なかった．

私にとって，守正先生は，いつも昭正先生と重なってみえていた．今から18年前，第10回日本医学教育学会大会は，帝京大学医学部の講堂や教室を使って行われた．この大会は，運営委員会の合意をえ，すべてワークショップ形式で行われることになった．当時，医学教育者のためのワークショップに全力を注いでおられた昭正先生には1年間の学会準備，そして3日間にわたった大会にも，文字通り全面的に参加していただいた．

学会中は，奥様がいつも来てくださった．昭正先生はワークショップのオリエンテーションもいたって平然と例の調子でなされ，知らない人には，先生の大へんな苦痛や努力はみえなかったと思う．実は，先生の闘病生活の終わり頃であったのである．大会には渾身の力をふり絞られたと思う．控え室で休みをとっておられたときのご様子が思い出される．学会の10日後に亡くなられた．今も何かあると，昭正先生が「存命なら」と思う．

昨年9月，医学教育振興財団の高知医大訪問に際し，守正先生と奥様に同じ飛行機でお目にかかった．大学訪問の2日目，先生は長い司会をなされた．守正先生の平生をあまり存じあげない私は，そのときも，翌年3月の懸田先生のご葬儀のときも，そして財団の運営委員会のときも，先生がそんなに大へんなご病気とそして苦痛と闘っておられるとは気がつかなかった．ご存知のように，先生は，表情も少なく，歩くのもゆっくりであった．守正先生はこのような方と理解していたのである．しかし，間もなく，ご病気のこと大へんな痛みのことを知り，自分の目のなさに愕然としたことであった．

守正先生とのお別れは，昭正先生にも劣らぬ強いインパクトを皆に与えるものであった．

大会の直前，短時間でもお目にかかりたいと思ったが，結局果せなかった．

大会での先生のお話がビデオにとられた．これは，本当に偶然ともいうべくおからだの調子の良かったある日，ビデオどりが成功した由を細田瑳一先生から伺っていた．司会役を承っていた私は，このビデオを事前に拝見させていただいた．

お話の原稿は，半年間の推敲を重ねられたことがよく分かる，大へん立派なもので，医学教育者の胸をつよく打つものであった．遺影を拝しての大会長講演のビデオが多くの人々に大きな感銘を与えたと，後に，多くの方の口から伺うことができた．

守正・昭正のご兄弟は，文字通り医学教育に殉じられた．今も，お2人が，私にはますます重なってみえている．

＊　＊　＊

第11期の努力が，3年目にようやく実を結んだことがある．「日本医学会への参加登録」である．これは，第12期の堀会長，また，運営委員会への最大の贈り物になった．田中　勧副会長を中心とした運営委員会の努力の賜であった．第11期の今1つの努力目標は，「学会の法人化」であったが，学会の財政建直しが第一とわかり，結局は努力の方向を決めるに止まった．田中・橋本両副会長，堀，尾島両監事を中心とした努力は次期への申送りとなった．

1つ特筆しておくことがある．韓国医学教育学会との関係親密化である．韓国医学学会の金　勇一会長，李　根副会長を中心に22名の方たちが1996年2月に来日，日本医学教育学会と合同委員会を開催し，1日懇親の実をあげた．続いて，東京女子医大，筑波大，自治医大を歴訪された．

これらが機縁となって，金会長，李副会長が第28回，第29回大会に来日され，金会長は運営委員会にも出席された．西園昌久，紀伊國献三，植村研一の諸氏に小生ら，わが国からも医学教育に関連して彼地を訪問する会員が増えた．1998年度，日韓合同の医学教育研究を日本学術振興会に申請

World Summit of Deans and Experts on Health and Medical Education, September 2-7, 1996. ブエノスアイレス

ブエノスアイレス大学が数年前より計画していた医学教育に関する集まり．南米・中米・北米が中心で，合衆国，カナダなどから10名余り，また，ヨーロッパから10名余，アジアは日本とマレーシア，東京の国連大学の学長H. G. de Souza教授（ブラジル出身）の3人であった．

300名以上入ると思われる会場が満員で，地元のブエノスアイレス，アルゼンチン各地，それにブラジル，チリなど南米の人達が大勢つめかけていたのには驚かされた．人々の会話はほとんどスペイン語．発表はスペイン語，英語，いずれも同時通訳され，質問が常にあまりにも活発なこと，質問者がしばしば開業医と名乗っていたのも注目されることであった．

組織委員会は，ブエノスアイレス大学の医学部長L. N. Ferreira教授，前副学長のD. Prigollini教授と数人の人達から成り立っていた．目的は，あまりに大人数の医学生を抱えるなどアルゼンチンの医学教育の改革にあると思われたが，新しい展開をみせる医学・医療，とりまく情報過剰，社会の要請の変化など，将来をみすえて対応したいとするグローバルな姿勢は大へん印象的であった．

ジェット機を乗りついで丸一日以上かかる遠出であったが，10数年間に経済を回復してきたブエノスアイレスを見，アルゼンチンはじめ世界有数の医学教育者に会った．22年来の友，ジェファソン医大のJ. Gonnella医学部長夫妻にも久し振りに会うことができた．有難い創価大学のご推挙の由，感謝申し上げる．

（鈴木淳一）

（医学教育 1996，**27**：370）

しているが，これが受け入れられると，日韓両医学教育学会の関係もさらに緊密になることと期待している．

国際関係でもう1つ．私は1996年9月にブエノスアイレス大学が主催したWorld Summit of Deans and Experts on Health and Medical Educationに出席した．問題点の指摘とともにグローバルな21世紀へ向けての方向を目指すものであった．これを引用しておきたい．

第12期の会長を，堀　原一氏にお願いして，学会にとって本当によかったと思っている．堀さんの筑波大学時代の医学教育への熱意，実績は誰しも認めていることであり，その間，医学教育学会への貢献も数知れず，つねにfirst choiseで本学会に臨まれたことに感銘していた．

第12期，1年目を終えた今日，学会の活力が倍増して前進していることに心より大きな拍手と賛辞を贈りたい．